

自主シンポジウム 5

『認識と文化』研究の現在と未来

企画・司会	田島信元 (東京外国語大学)
	黒須俊夫 (群馬大学)
	茂呂雄二 (筑波大学)
話題提供	佐伯 胖 (東京大学)
	天野 清 (中央大学)
	無藤 隆 (お茶の水女子大学)
	北山 忍 (京都大学)
指定討論	上野直樹 (国立教育研究所)
	山田洋子 (京都大学)
	田島信元 (東京外国語大学)

『認識と文化』研究の広がり

心理学の領域で文化要因を考慮に入れた研究の歴史はかならずしも新しくはないが、その方法論上の制約から華々しい成果をあげてきたとはいえないのが事実であろう。しかし近年、文化人類学、社会学などの隣接領域の影響を受け、文化獲得（影響）過程について積極的に変数化していこうという気運が生じている。もちろん、アプローチのしかたは各領域の独自性が発揮されているわけであるが、文化過程と個人過程とのインタラクションを吟味していくという目標志向は共有されていると考えられる。逆に言うと、大枠での共通の目標達成のために、複数の異なるアプローチないし、複数の視点が並存しているというのが現状なのである。こうした状況ゆえに、異なるアプローチ間の対話を通して、文化概念や方法論のさらなる精緻化を目指すことが可能となってきたと考えられる。

以上のような動きは国際的な気運のなかにもみられる。ひとつの例として、現在、Leont'ev流の活動理論を基盤として出発した国際文化研究・活動理論学会 (ISCRAT) において、参加者とその興味に大きな広がり多様化が見られるようになり、後に別目的で設立されたWertschらのConference for Sociocultural Studiesの参加者とかなりオーバーラップしてきたという現状があり、両学会を統合化する話もちあがっているほどである。もちろん、両学会においては、参加者がカバーする文化圏およびアプローチや注目する領域に違いがあるのだが、統合化することで学会がカバーする文化圏・領域の拡大につながるということが評価点にあげられるほど、多様化が受け入れられてき

ているのである。その意味では、現在、日本を含む東洋圏の研究者の参加が強く求められていると同時に、日本における国際会議開催への期待も高まっている。

そこで本シンポジウムでは、近い将来の日本の学会開催をもにらんだ上で、話題提供者、指定討論者の方々にそれぞれ異なる視点から「認識と文化」に関する研究動向の特性についてご提案をいただき、フロアの方々とともに対話の出発点としたいと考えている。

そこで、以下にシンポジウムで焦点化したいポイントを列記しておきたい。

『認識と文化』研究の多様性

『認識と文化』研究は、複数の研究アプローチの合流点に形成されつつある。複数の研究アプローチは、それぞれに異なる出自と関心をもっており、文化と心の営みをめぐる議論に多様性を与えている。今回の参加者のバックグラウンドに近いものも含めて、以下のようなアプローチが上げられよう。

- ・文化人類学的文化心理学
- ・ヴィゴツキーに由来する記号論的アプローチ
- ・要因としての文化に注目する社会心理学
- ・エスノメソドロジー的行動の研究

いうまでもなく、いずれもが独自性をもっており、他のアプローチとの間に相補性をもっている。さしあたりは、この多様性をいかすことが「認識と文化」研究を深化させることにつながるだろう。

『認識と文化』研究をめぐる6つの問題

『認識と文化』研究の多様性は、文化の捉え方

や方法論についてさらに明確化すべき概念と議論すべき問題があることを意味する。以下の問いはその一部であるが、このシンポジウムで議論してみたい問題である。

1 文化の位置をめぐる問題

これは、文化の内在、外在の問題と言い換えることができよう。あるいは、文化と主体の関係の問題とも言い換えることもできるものである。

文化は外在的なシステムだ、とする立場も可能であろう。それに対して、文化は実在というよりも、行為者の行為によって達成ないしは構成されるものに過ぎないとする立場もあろう。この両者は、内一外のカルテジエンの構えに汚染されており、さらに第三の方向を開拓すべきだという立場もあるだろう。

2 文化の多様性と焦点化をめぐる問題

文化は複雑な媒介のネットワークを張り巡らして、私たちの行為と認識を統御する。

いわば文化は、Wittgenstein流に言えば、工具箱であり、その中には、マニュアルな道具もあれば、語り（ナラティブ）や言語、そしてさまざまな身体技法も含まれる。

このうちのどれかに焦点化して、文化と認識を明らかにしようとするのか。焦点化するとすればどれなのか。

あるいは、複雑なネットワークあるいはシステムという全体性を問題にするのか。そしてそれはどのようにして実現されるのか。

3 研究方法の意味

これはフィールド研究の意味をめぐる問題でもある。というのも、現在、文化的研究をめざすもの多くが、現場における観察を重視するアプローチを採用しているからである。文化を研究するには、実験室よりも現実の文化のプロセスを観察したほうがたしかに手っ取り早い。

しかしフィールドワーク、あるいはエスノグラフィは困難をもつ。それは、明確な方法の基準がない、方法なき方法論といわれてもいたしかたない性格を持つ。観察の結果をいくら詳細に記述しても、文化は記述可能、説明可能にならないのである。そもそも、観察は理論的な指向あるいは解釈のグリッドを必要としている。フィールドワ

ークの困難は実験室研究の困難でもある。

結局のところ、文化に関する概念装置と問題の深化がポイントである。

4 歴史の問題

文化によって行為は多様に変化する。それは時間経過に依存したプロセスである。そこには多重の時間が流れる。あるいは、Vygotskyが述べるように、文化をとおして、個体は多重の歴史と出会うことになる。

系統発生あるいは自然史。人間の歴史。個体の発生。あるいは、Scribnerにならって、具体的なそれぞれの社会史も追加可能である。この多重の歴史のどれかを重視するのか、するならばどれか。あるいは、二つの組み合わせから、文化の問題を浮き彫りにするのかなどなど。いくつかの問題の立て方が可能となろう。

5 相対主義と普遍主義をめぐる問題

文化は、つねに、文化の間として意識される。ただ一つの文化ならば、文化を問題する必要も意味もまったくない。特定の文化の内部にいるならば、文化はそもそも不可視である。

相対主義と普遍主義の問題が、複数の文化の「あいだ」をめぐる、提起されてきた。文化のあいだは通約可能なのか。科学的な心理学は、どちらの流儀を採用すべきなのか。などなど。

6 心理学の文化化の意味

文化を心理学が意識するとき、つまり心理学の文化化がおこなわれたとき、心理学はどのようなインプリケーションを得ることになるのか。心理学の文化化は何をもたらすことになるのか。

たとえば、5の相対主義と普遍主義をめぐる問題を意識するとき、心理学は当然のごとく、心理学自身に内在する政治性を意識することになるだろう。それは、ColeやWertschらによって行われているように、ある種の批判心理学として結実している。

なお、佐伯氏には状況論的学習論の立場から、天野氏には活動理論の立場から、無藤氏には認知・発達心理学の立場から、北山氏には社会心理学・文化心理学の立場から、それぞれ話題提供をいただく予定である。